

四国新居浜 別子銅山案内マップ

立川・端出場 エリア

JR新居浜駅より車で 15分
新居浜ICより車で 10分

① 旧泉寿亭特別室棟

【国の登録有形文化財】
昭和12年、別子開坑250年記念の来客を迎えるために、住友企業によって建てられた純和風の接待館です。「泉寿亭」は、住友の屋号である「泉屋」を寿く館として名づけられました。平成2年の別子開坑300年の翌年、記念図書館建設のため現在地に移築されました。

② 旧端出場水力発電所

【国の登録有形文化財】
明治45年、増大する電力需要に対応するために建設されました。当時、日本一の落差(597m)を利用した国内最大級の出力3,000KWの発電所でした。別子銅山の近代化を支えるとともに鉱山から派生した諸事業の発展に大きく貢献しました。

③ 端出場鉄橋・隧道

【国の登録有形文化財】
明治26年の別子鉱山鉄道下部線の開通時に完成しました。鉄橋はドイツ製のピントラス橋で、特徴として河津に対して約60度斜めに設置されています。鉄橋・隧道(トンネル)とも、マイントピア別子の観光鉄道として現在も利用されています。

④ 第四通洞

大正4年に大立坑までの4,596mを貫通し、坑内運搬の大動脈として別子銅山の近代化や発展に大きく貢献しました。当初、工期は13年を予定していましたが、一組20人の鉱夫が1日4交替で作業に当り、5年8ヶ月で完成しました。完成後は、毎日1,000人にもおよぶ入坑を60年にわたり支えてきました。

シーメンス発電機

建物内部には、ドイツのシーメンス社製発電機のほか、フォイト社製のベルト水車が保存されており、稼働当時の建物と使用されていた発電機がそのままの状態で見学することは大変貴重です。また、外部の見学デッキから放水路に入るとベルト水車を見ることができます。

⑤ 遠登志橋

【国の登録有形文化財】
明治38年に長さ48.26m、幅2.4m、高さ23.2mで完成した日本最古級の鋼製のアーチ橋です。現在はアーチ橋の直上に吊橋を掛けて現状保存を図っています。東平や別子山地区へいく生活道として、また放水路として利用されました。

星越 エリア

JR新居浜駅より車で 10分
新居浜ICより車で 15分

⑥ 住友山田社宅

【国の登録有形文化財】
鉱山労働者による都市計画の一環として昭和4年から建設が始まり、当時は新居浜屈指の高級住宅街で、最盛期には約290戸の社宅がありました。令和2年8月、現存6棟8件が国の登録有形文化財となりました。(令和2年形末から一部限定期間を開始)

外国人技師東社宅

【国の登録有形文化財】
昭和5年に外国人技術者の宿舎として建設された2階建ての洋館で、南側には広い庭を取り、サンルームやテラスがあります。住友山田社宅の中で現存する2階建ての建物は、外国人社宅の2棟だけです。

⑦ 旧新居浜選鉱場

別子銅山では、銅分の少ない鉱石を人間の目で選別していましたが、捨てていた低品位の鉱石からも効率よく製錬するため、大正14年に機械選鉱場が建設されました。現在は、建屋を撤去し跡地には樹木等が植栽され旧別子と同様、自然に戻ろうとしています。

⑧ 旧星越駅舎

大正14年、新居浜選鉱場の操業に併せて、設置されました。昭和4年には、住友山田社宅の建設に合わせ、別子鉱山鉄道が地方鉄道となり、星越駅は地域の玄関口となりました。また、星越駅から西へ200m程の地点には、星越トンネルも残っており、駅舎は平成26年に改修され当時の趣を今に伝えています。

⑨ 日暮別邸記念館

明治39年に四阪島に建てられた住友家の別邸を移築復元し、記念館として公開しています。当時は、煙害問題解決のために移転した四阪島製錬所が見渡せる場所にありました。製錬所を担当した技師が「日」が暮れるまで構想を練った場所と言われており、そのことが名称の由来となっています。建物は、建築家 野口孫市が設計した洋館です。現在は、当時の雰囲気を残した館内に歴史資料を展示し、館外には市が一望できる展望台も併設されています。

四阪島 エリア

水揚げポンプ小屋

明治40年完成。四阪島は水の出ない島であったため、生活・工業用水は新居浜から水船で運ぶ真水と周辺の海水が用いられました。この水揚げポンプは生活用で、構付けした水船の真水と、共同浴場用の海水を山頂の各貯水タンクへ送っていました。

GF型転炉

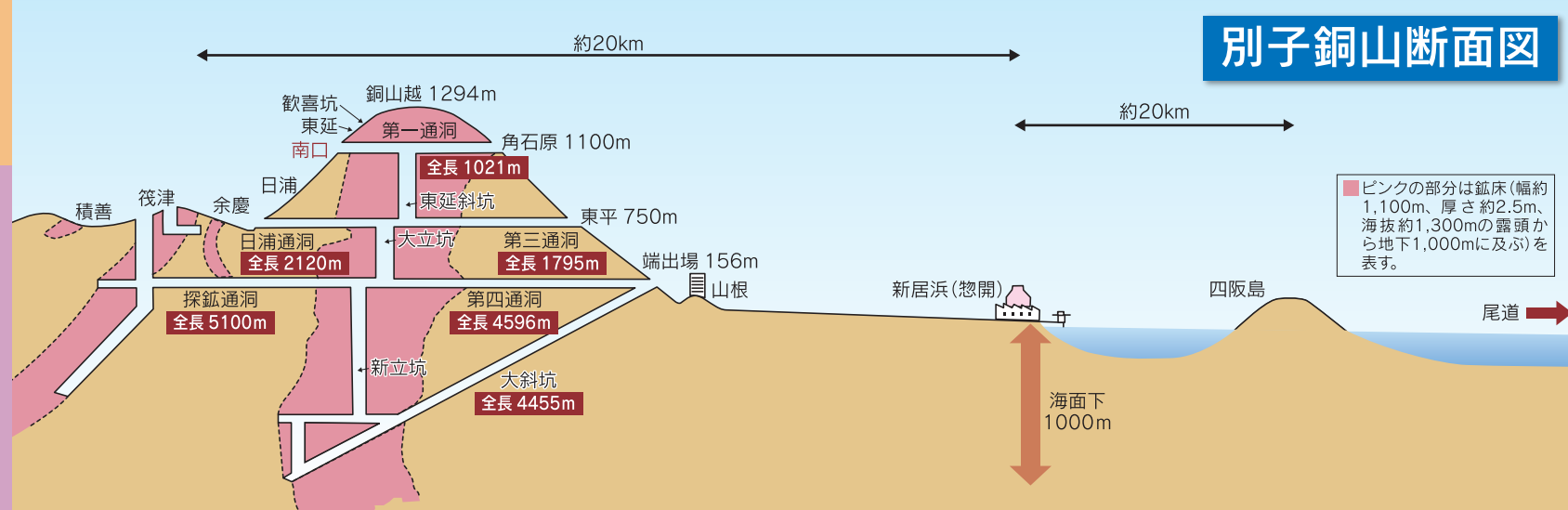
転炉とは、製錬時間と燃料を節約する熔鉱炉です。溶けた「カウ」を転炉に入れ、そこに酸素を吹き込み温度を上げることにより、鉄分(ケイ酸鉄)を取り除き、高品位の粗銅を作ります。

愛媛県総合科学博物館所蔵

からみ電車

大正11年から昭和30年代まで四阪島の製錬所で使用されました。熔鉱炉から出てくる「からみ」(ケイ酸鉄成分の残りカス)を壺に入れ、海岸まで運び壺を傾けて流す仕組みです。

愛媛県総合科学博物館所蔵



上原・山根 エリア

JR新居浜駅より車で 15分
新居浜ICより車で 10分

⑩ 別子銅山記念館

日本経済の近代化に大きく貢献した別子銅山の意義を永く後世に伝えるため、昭和50年に開館しました。館内は、坑道と併設された半地下構造となっており、落ち着いた雰囲気の中、別子銅山300年の歴史を堪能することができます。記念館の屋根には、別子銅山が開坑された5月にちなみ、サツキが「万本植えられ、サツキの名所としても親しまれています。

別子1号機関車

展示されている機関車は、ドイツのクラウス社製で、別子鉱山鉄道は、海拔1,000m余りの断崖絶壁を走る山岳鉄道だった上部線と平野部を走る下部線の総称で、「日本で最初の索道を併用した山岳鉱山鉄道」でした。

⑬ 広瀬歴史記念館

広瀬幸平の足跡を通して、工業都市・新居浜の生い立ちと日本の産業の近代化の歩みをたどることができる施設です。建物からそびえる塔は、「現代の望遠鏡」と呼ばれ、潜望鏡のような仕組みを利用し、南北に赤石連峰と焼瀬を満喫することができます。

⑪ 旧山根製錬所煙突

【国の登録有形文化財】
明治21年、現在の別子銅山記念館周辺に山根製錬所が設置されましたが、現在は高さ20mのレンガ煙突が残っているだけです。当時の先端技術で銅製錬と共に硫酸製造や製鉄試験を行いました。現在は、「えんとつ山」の愛称で親しまれています。

⑫ 山根競技場観覧席

【国の登録有形文化財】
昭和3年、富尾勘治の指揮のもと、住友各企業の社員による作務(勤労奉仕)により建設されました。収容人員は約6万人とされ、当時は住友各企業の運動会が行われました。現在では太鼓祭りのかきくべ会場として、多くの観客で埋め尽くされます。

⑭ 旧広瀬邸・庭園

【国の重要文化財・名勝】
旧広瀬邸は、明治中期の大規模和風住宅で、平成15年、新居浜市の重要文化財として指定、庭園は平成30年、国の名勝に指定されました。建具に用いられているガラスをほし、連書、洋式トイレ、庫裏など数多くの西洋からの輸入品を見ることができ、母屋2階の望遠鏡と呼ばれる部屋からは、新居浜市街を一望することができます。

東平 エリア

「東平歴史資料館 表面参照」

JR新居浜駅より車で 40分
新居浜ICより車で 35分
東平駐車場より徒歩 約15分

⑮ 旧東平貯鉱庫・選鉱場

「東洋のマチュピチュ」と称されている施設は、東平の「貯鉱庫」と「選鉱場」を指しています。坑道から運び出された鉱石は、選鉱場に運ばれ、そこに設置されている貯鉱庫に下ろし、索道を利用して黒石のち選鉱場へと搬出されました。昭和43年に、索道は廃止されましたが、貯鉱庫は、当時のままの姿で残っています。

⑰ 東平隧道

明治36年、第三通洞から東平選鉱場まで2か所のトンネルが完成しました。第三通洞に近い土坂(すべりざか)隧道と、この東平隧道です。トンネル内には、坑内を走っていた「かご電車」などの鉱山の運搬機器が展示されています。

かご電車

一般の人が第三通洞を通り別子山へ行くために、昭和13年から使われました。時速約8kmで運行され、定員は8名でした。昭和43年の東平閉坑後も使用され、昭和48年まで運行されました。

⑯ 旧東平配電所

明治37年、新居浜方面の各発電所から送られる電気を変圧し、別子東延・角石原・東平・新居浜の各施設へ配電しました。その後山林課事務所、保安本部として、レリーフ作りなどを体験できます。

⑱ 旧第三変電所

明治37年に落し水力発電所の電気を配電するために建設されましたが、40年に焼失し、42年に再建されたものです。大正5年からは別子と東平の変電所を併合し、昭和43年の東平撤退まで鉱山用と社宅用の電気を配電しました。

⑲ 第三通洞

明治27年に開削され、明治35年に東延斜坑底までの1,820mを貫通しました。さらに、日浦通洞と繋がることにより、東平～日浦間の約4,000mが結ばれました。昭和13年には、かご電車の運転が始まり、新居浜側と別子山側を結ぶ唯一の交通機関として一般にも利用されました。

旧別子 エリア

JR新居浜駅より車で 50分
新居浜ICより車で 45分
日浦登山口より銅山越まで 約2時間

⑳ 歓喜坑

別子銅山発祥の記念すべき最初の坑道です。住友家が経営していた備中の吉岡銅山の支配人であった田向重右衛門一行が調査し、大変有望な鉱床で大喜がしたことになんで名づけられました。坑口は、平成13年に開坑当時に近い姿に復元されました。

㉑ 第一通洞

明治15年に開削された別子銅山最初の通洞(トンネル)です。広瀬幸平は、手廻りからダイナマイトを利用した掘削に変え、明治19年に、全長1,021mをわずか4年で掘り抜き完成させました。山中に響くダイナマイトは、別子銅山が近代化へ向け大きく歩みだす号砲となりました。

㉒ 牛車道

明治13年、運搬の近代化として別子の勘場(鉱山本部)から銅山越を越え、新居浜口屋までの牛車道が完成しました。「仲持」と呼ばれる人力から牛車となり、明治26年に別子鉱山鉄道に変更されました。

㉓ 小足谷劇場跡

明治22年に建設された本格的な劇場施設で、廻り舞台もあり、収容人数が1,000人を超えていたと言われています。山神祭が開催される毎年5月の3日間、京都や大阪から芸人を呼んで歌舞伎や芝居が上演され、銅山で働く人たちに喜びと安らぎを提供していました。

㉔ 蘭塔場

開坑3年後の元禄7年(1694)に別子大火災が発生し、132人が亡くなりました。住友家は蘭塔場(墓所)を旧勘場の沢下に築きました。明治維新後、広瀬幸平が現在の高台に移設しました。現在も毎年、会社関係者の供養登山が続けられています。

㉕ 小足谷接待館跡

明治20年代になると、小足谷が鉱山町として発展し、要人や賓客の宿泊のために接待館が作られました。別子支配人伊庭貞剛もここで鉱山改革を思索したと言われています。現在は、重厚な赤レンガの塙のみが残っています。